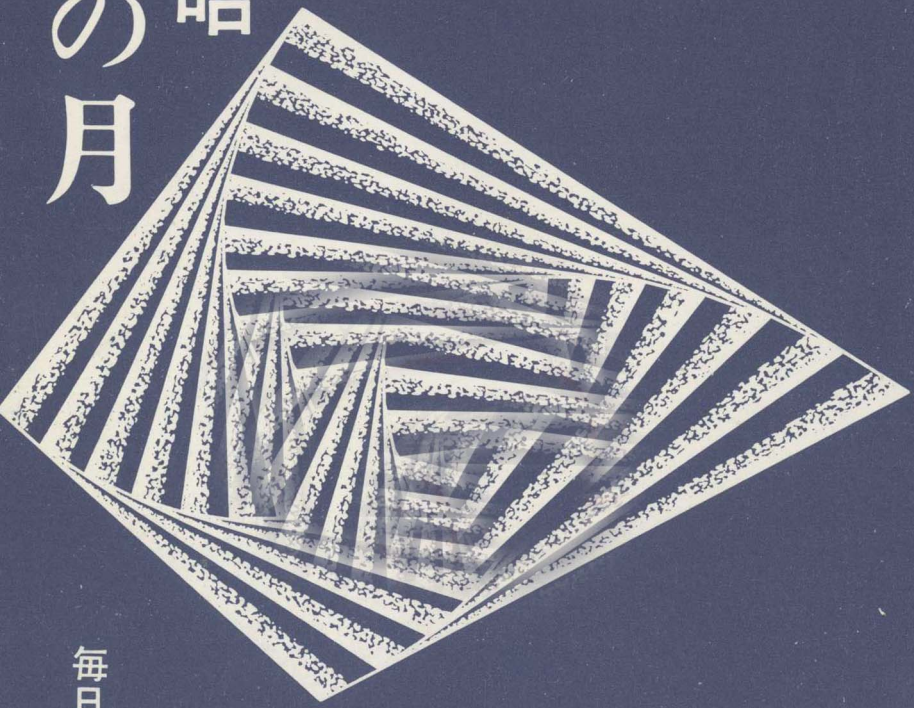
下弦の月

吉村 昭

毎日新聞社

弦の月

村昭



毎日新聞社

下弦の月

定価600円

昭和48年2月1日　印刷
昭和48年2月10日　発行

著者　吉村　昭
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉区紺屋町
〒450　名古屋市中村区堀内町

印刷／中央精版
製本／佐久間製本

© A. YOSHIMURA
1973

検印廃止　0093—400077—7904

目次

下弦の月　三
探す　五
手首の記憶　七
剃刀　一三
炎と桜の記憶　一五
動物園　一九
十点鐘　二五

裝幀　倉橋三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

下弦の月

一

線路のつぎ目に車輪のあたる音が起って、二輛連結の小さな客車が、ゆれながら速度を落した。窓外の景色の流れが停止し、軽便鉄道の汽車が多古駅についた。

馬場は、旅行鞄を手に客車から降りると、改札口をすり抜けた。空気はよどみ、町の低い家並が残暑にあえぐようにひっそりと並んでいる。

白っぽく乾いた道を歩き出した馬場は、不意に足をとめた。足もとの大地がゆれ、体がよろめくのを意識したのだ。

地震か、とかれは道の両側にならぶ家並を見つめたが、家々はまばゆい陽光にさらされて微動もしていない。

かれは、苦笑して歩き出した。丁度三年前に起った関東大震災を東京で経験したかれは、その後もしばしば足もとのゆれているような錯覚にとらわれて息をひそめた。多くは軽い目まいがした時に感じるのだが、動揺のはげしい軽便鉄道に乗ってきた震動が、体に残っていて足がふらついたの

かも知れなかった。

出張を命じられたのは昨日社に出た折で、かれは下宿先にもどるとあわただしく旅装をととのえ、両国駅から汽車に乗って千葉県八日市場へ行き一泊した。そして、軽便鉄道の客車にゆられて多古町にたどりついたのだ。

大正十二年に起った関東大震災以来、世情は混沌としていた。震災後の復興景気で一時好況をむかえていた経済界も急速に弱体化し、昭和初期の金融恐慌のきざしを充分に内蔵していた。政界でも憲政会、政友会の二大政党間で醜い政争が繰返されて汚職事件が相つぎ、共産党の創立等左翼関係の政治団体の組織化も活発だった。都市や農・漁村では争議が続発し、政府の弾圧も強化され、権勢をほしいままにしている軍人、官僚、警察関係者に対する庶民の反感はつのっていた。新聞の記事も世情を反映して暗い内容のものばかりが目立っていたが、そうした中で、突然千葉県内の寒村で起った殺人、傷害、放火事件が世人の関心をひいた。

事件発生直後は新聞にも小さな記事で扱われていたが、犯人が山中にのがれ警察の探索の網の目を巧みに避けて逃亡をつづけていることがあきらかになるにつれ、急に読者の興味はたかまった。千葉県下の警察官を大動員した捜査陣の追及にも屈服しない男の行為が、庶民を痛快がらせていたのだ。

現地には、有力紙の記者やカメラマンが続々と送りこまれ、連日のように犯人の逃避行が新聞の紙面をかざった。馬場の所属する東京日日新聞でも初めは佐原通信部の坂本斉一記者が単独で記事

を送っていたが、本社社会部から小坂新夫副部長がキャップとして派遣され、カメラマンをふくめた八名の取材員が殺人現場近くの二本松に本部を置いて取材に当っていた。

警察の陣容から考えて犯人の逮捕は時間の問題とされていたが、一週間たち二週間たっても犯人は逮捕されない。それどころか犯人は村の中にしばしば姿を現わし、しかも、怨恨のため殺人を繰返すおそれもあって、読者の関心は加速度的にたかまった。

新聞各紙の購読数は増し、記者の取材競争は激化していた。そのような情勢の中で、東京日日新聞では若手の社会部記者馬場秀夫を増援のため派遣したのだ。

馬場は、鳥打帽をぬぐと手拭で額の汗をぬぐった。すでに犯人が逃亡してから、十五日間が経過している。事件の概要は、各紙の記事で一応の知識を得ているが、警察陣は犯行のおこなわれた村を中心に厳重な包囲網をめぐらし、犯人はその中にひそんでいる。

犯人は、超人的な能力の持主らしいが、それにも当然限界はあるはずで、いつかは必ず逮捕されるにちがいなかった。新聞の読者は、犯人が警察陣の追及をのがれて一日でも長く逃げまわることをひそかに期待しているが、同時に逮捕の瞬間も待ち望んでいる。

馬場は、読者の期待にこたえて秀れた記事を本社に送りたいと思った。

町の路上に、人影はなかった。住民は凶器をもつ犯人を恐れて家の中にとじこもっているらしく、時折眼にできるのは警察に協力している印絆纏(しるしばんてん)をまとった消防組員の姿だけであった。

かれは、手にした略図をたよりに道をたどり、一軒の家の前に立った。土間に入ると、机を前に

あぐらをかいているキャップの小坂の姿がみえた。
「来たな、ごくろうさん」
小坂が、原稿に走らせていた鉛筆を置いた。
「どんな状況です」
馬場がたずねると、
「昨夜犯人が山倉虎吉という男の家へ忍びこんでな、大きな草刈り鎌を盗んだことがわかった。警察では、大騒ぎをしている」
と、小坂は答えた。そして、
「事件を初めから追っている佐原通信部の坂本君が今に帰ってくるだろうから、詳細をきいて頭にたたきこんでくれ」
と言うと、再び鉛筆をせわしそうに動かしはじめた。
馬場は、土間に靴をぬぐと編集室にあてられた部屋に上った。犯人が草刈り鎌を入手したということは、殺人を繰返す意志のあることをしめしている。もしも殺人事件が再発すれば、読者の関心はさらに増す。
若い馬場は、興奮した。東京では新聞記事になる種が乏しく、暑さに堪えながら町の中を歩く日がつづいていた。それにくらべて犯行のおこなわれた村では、警察側がすでに延べ五千名に達する警察官と近在の町村の青年団、消防組員を動員して犯人の逮捕につとめている。その渦中に新聞記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

者として身を投じることは、得難い幸運だと思った。

灯がともった頃、記者が三名連れ立ってもどってきた。かれらは、一様に血走った眼をしていて、小坂に取材してきた話を口早に報告する。その中に、佐原通信部の坂本斉一記者もいた。

その夜、馬場は、坂本から事件の経過を詳細にきいた。坂本の口から洩れる言葉からは、淫靡(いんび)でそして貧しい村の生活が浮び上った。そうした生活環境を背景に、事件は当然のように起ったとも思えた。

二

殺人、傷害、放火の罪を犯したのは、岩淵熊次郎という三十五歳の荷馬車ひきであった。

熊次郎は、千葉県香取郡久賀村大字出沼の小作農の次男として生れた。家が貧しく、村の尋常小学校も欠席がちで三年でしりぞき、そのため手紙を書くこともできなかった。

十歳になったばかりの熊次郎は、憲政会所属の県会議員をつとめたことのある村の豪農五木田太郎吉の作男としてやとわれた。村の農家の大半は、豪農の土地を耕作する小作農で、掘立小舎同然の家に住み辛うじて飢えをしのいでいた。

熊次郎は、二十五歳まで五木田のもとで労働に従事し、馬車ひきになった。その間、かれは二歳年上の女を妻とし、五人の子の父になっていた。

かれは、邪心のない男で村人に好感をいだかれていた。五尺一寸に満たぬ背の低い男だったが、

首は太く肩幅もたくましく張っていて、米二俵を同時にかつぐ体力の持主だった。仕事は熱心で約束は必ず守り、同業者にも親切だった。新しく馬車ひきになった者には、四日も五日も付添って手綱の扱いをなれさせたり、近所の者たちと酒食を共にする時も気前よく金を払ったりした。人の苦境をみるとすすんで相談にのり、病人の出た家では農耕の手助けをした。子供にも親切で、歩いている子供を荷馬車に乗せてやることも多かった。

かれは、争いの仲裁をしたり旧主である憲政会系の五木田太郎吉のために選挙運動に走りまわったりしている間に、いつの間にか馬車ひき仲間の顔役になっていた。

醜い容貌をしたかれは、四年ほど前から一人の女と情を交わすようになっていた。

村内に上州屋という居酒屋があって、熊次郎はその店に出入りしているうちに店主の孫娘であるおけいという酌婦となじみになったのだ。

おけいは二十三歳で、年上の妻をもつ熊次郎はその肉体に魅せられた。おけいは、金銭を代償に多くの男と接してきていたが、熊次郎の熱意にほだされて関係をもつようになったのだ。

素朴な熊次郎は、わずかな賃金の中からおけいに金をあたえ、毎月米を送りとどけた。そして、時には佐原や多古の町から仕事の帰りに流行の反物などを買ってきてあたえることもあった。

そうした生活が四年ほどつづいた頃、熊次郎は、さらにおけい以外の女とも交渉をもった。それは柳橋信一という男の妻おけんで、夫婦喧嘩の末家出し吉野屋という旅館の女中をしていた二十八歳の女であった。

おけんは、おはなという名で同旅館に勤めている間に熊次郎と知り合った。が、おはなは、旅館に前借金があると熊次郎をあざむき、それを信じたかれは、おはなの歓心を買うため商売道具の馬を売り払って五十円をおはなにあたえた。

熊次郎は、おはなを旅人宿経営の土屋忠治方にあずけたが、夜毎に土屋方を訪れてくる熊次郎を忠治夫婦は不快がった。そのことに立腹した熊次郎は、忠治夫婦と仲たがいし、おはなをさらに村の荒物商岩井長松方に移させた。

しかし、おはなは、岩井方に七日間いただけで、夫の柳橋信一のもとに帰ってしまった。

失望した熊次郎は、やがておはなが前借金でしばられていたことはなく、預け先の土屋忠治、岩井長松が柳橋信一と通じておはなを信一のもとに送り帰したことを知り、おはな、信一、忠治、長松の四名に深い恨みをいだいた。

熊次郎は、馬を売り払ってしまっていたのに、加瀬という男にあたかも馬があるように装い、馬を売る約束をして代金八十円を詐取した。そして、おはなに裏切られた鬱憤をいやすため、専ら上州屋酌婦おけいに愛情を注いだ。

しかし、おけいは、いつの間にか熊次郎をうとんじるようになり、相変らずかれから金品を受けながらも、その年の三月頃からひそかに村の若い農夫菅沢寅松と夜を過すようになっていた。

熊次郎は、そのことを知らず詐取した馬の代金の半ばをおけいに与えたりしていたが、やがて寅松の存在に気づいた。

六月二十五日夜、おけいの家を訪れた熊次郎は、雨戸の節穴から蚊帳の中で抱き合っているおけいと寅松の姿を見た。激怒したかれは、雨戸を破って室内に入ると寅松の腕をつかんだが、寅松は裏戸を押し倒して逃げた。

熊次郎は、戸外に走り出ようとしたおけいの髪をつかみ拳をふりつづけた。かれは、おはなにつづいておけいにもそむかれたことが腹立たしかった。

熊次郎が家を出てゆくと、おけいは、乱れきった髪をにぎって村の駐在所へ走った。それを知った熊次郎は、自ら駐在所に出頭し、向後国松巡査からきびしく説諭された。

しかし、その後も寅松とおけいの交渉はつづいていたので、熊次郎の憤りはさらにつのり、寅松を殺すと公言するようになった。村の菅沢種雄が争いの仲裁に入ったが、種雄は向後巡査と相談しておけいに熊次郎との仲を清算するようにすすめたため、熊次郎は、種雄と向後巡査にも恨みをいだいた。

熊次郎は、孤立した。おはな、おけいの二人の女に分不相応の贈物をしながら両者からあざむかれ、しかも女をとりまく者たちからも冷たい扱いを受ける。多情ではあったが純情な熊次郎は、周囲の者から愚弄されていることを強く意識した。

七月七日午前十時頃、おけいが麦畑で野良仕事をしていると、熊次郎が姿を現わした。そして、おけいを上州屋へ引きずるようにして連れもどすと、午後四時頃まで寅松との関係を責めた。おけいの心は冷えきっていて、激昂した熊次郎は庖丁を突きつけて殺すと威嚇した。

おけいと同居していた祖父母は、老齢であったので熊次郎にさからうこともできなかったが、熊次郎が孫娘のおけいに庖丁を突きつけているのを眼にして、祖父啓十郎が駐在所に走った。

向後巡査がすぐに駆けつけ、熊次郎を脅迫罪の現行犯として逮捕し、多古警察分署へ連行した。

同分署の取調べで熊次郎が売馬代金の詐欺をおかしていたことも発覚し、八日市場区裁判所検事局に送られた。

送検されたことを知った旧主の元県議五木田太郎吉は、熊次郎のために奔走した。その努力が功を奏したのか八月十八日熊次郎は、同裁判所で懲役三ヵ月、執行猶予三年の刑を受け釈放された。

四十日間の勾留生活に落着きをとりもどした熊次郎は、翌日夜には五木田のもとを訪れて礼を述べ、五木田も熊次郎をさとして祝い酒をふるまった。

五木田の家を出た熊次郎は、妻子の待つ家に向って歩き出したが、途中でおけいの家に足を向けた。酒に酔っていた熊次郎は、おけいに詫び、願うことなら復縁したいと思ったのだ。

おけいは、家にいた。

熊次郎は、おだやかな表情でおけいに暴力をふるったことを詫び、おけいも熊次郎の態度に安堵し酒肴を出してもてなした。酔いの増した熊次郎は、泊ってゆきたいと懇願したが、おけいは頑なに拒否し帰宅をうながした。

その時、寅松が姿を現わした。熊次郎は、二人の仲がさらに深まり、おけいがその夜も寅松と共に過そうとしていることを知った。

熊次郎は、黙然と杯を重ねた。おけいは、気まずそうに坐った寅松の傍ににじり寄って酒をすすめている。その顔には、寅松に対する濃艶な思慕がにじみ出ていた。

熊次郎の頭は、激しく乱れた。かれは、獄房生活の辛さを思い起した。法廷に立たされ罪人の汚名も受けたのに、おけいは、自分をきらって寅松との仲を誇示さえしている。血が、頭に逆流した。

かれの口から、怒声がふき出た。鬱積していたものが一時にあふれ、かれは眼をいからせて立ち上った。かれは、自分の感情を抑えつけることができなくなっていた。

熊次郎は、おけいの髪をつかむと戸外へ引きずり出し、土間にあった薪をおけいの頭にたたきつけた。悲鳴をあげて倒れたおけいの頭部に、薪は執拗に打ちおろされ、髪の中から頭蓋骨がのぞくまでになった。

その凄まじい光景に、身をふるわせ壁に背をはりつけていた寅松は、硬直した足を動かして辛うじて裏戸から外に出た。そして、とうもろこし畑を這うようにして五十メートルはなれた農家にころがりこんだ。その間に、おけいの祖母とみは、必死になって熊次郎の腕にしがみついたが、かれはとみの頭部も薪で強打し、昏倒させた。

おけいを撲殺し、とみに重傷を負わせた熊次郎は、おけいの情人寅松の家へ走ったが留守だと知ると、おけいと自分の仲をさいた菅沢種雄の家に走って火を放った。

突然起った炎に、半鐘が鳴り、村の消防組員が駆けつけた。が、熊次郎は消火することを制し、それにさからった菅沢栄助の前額部と菅沢茂吉の背を鍬でたたき負傷させた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com